

# 特集

## 日本人の海外留学の促進に向けて

case study

# 「海外教育（特別）研究」実施と 新科目「海外フィールド・スタディ」の立ち上げ

上越教育大学 学長特別補佐（国際交流担当） 臼杵美由紀

### 「海外教育（特別）研究」の実施

教員養成大学である上越教育大学は、これまでの教師教育に加え、異文化理解に関する研究・教育を実践し、異文化理解マインドを持った教員を養成することを重要な使命の一つと考えてきた。本学の理念のもと、学部学生については、昭和五八年度から「海外教育研究」として、大学院学生については昭和六三年度から「海外教育特別研究」として、その国の教育の実情や生活文化に直接触れ、異文化・異民族に対する理解を深めるとともに、教育者として必要とされる広い視野や高い見識及び豊かな人間性の育成を図る目的で、学

生の海外派遣プログラムが実施されている。平成三年度まで、シンガポールで継続されたが、それ以降、カナダ、イギリス、韓国、アメリカ、中国にも、学生グループが派遣された。平成一四年度、一五年度、新たにオーストラリアで実施された参加型のプログラムをきっかけに、これまでの受け身的な形から、海外での授業実践が加えられ、平成一八年度から、「海外教育（特別）研究A・B・C」の授業として、韓国、アメリカ、オーストラリアで定期的な学生派遣の形を取るようになった。この授業は、一年間のプログラムとして設定されており、現職教員を含む大学院生と学部学生約二〇名がいくつかのグループを作り、現地の学校で授業実践をする。経験も年

齢も異なる大学院生と学部生の協力体制で授業を準備するという基本概念は、本学のカリキュラムの特徴として位置づけられていることである。現地実習は、一〇日あまりの短い期間であるが、数ヶ月の事前準備と、帰国後、数ヶ月を報告会・報告書作成に費やす。韓国では、韓国教員大学校との学生交流（短期留学プログラム）も開始され、隔年で派遣と受け入れを相互に行う交流に発展している。韓国のプログラムは、ホーム・ステイや、韓国学生受け入れに協力した本学学生達を中心に、受け入れの翌年、韓国で研修を行うという学生同士の関係の構築、そして、さらには、受け入れ・派遣を通じての引率教員・職員同士のつながりに寄与している。オーストラリ

### 「海外フィールド・スタディ」の開講

アの現地受け入れは、アデレードのウェストミンスター・スクールであるが、平成二〇年度、本学附属小学校児童の派遣が予定されており、これをきっかけにウェストミンスター・スクールの初等部との相互交流に発展する見通しである。将来的には、やはり、韓国と同様、隔年で派遣と受け入れを相互に行う計画で、上越教育大学のオーストラリアへの派遣学生、引率教員、そして、附属小学校教職員の協力のもと、国際交流推進室を中心に、上越へのウェストミンスター・スクール受け入れ体制を整え、充実した交流活動を推し進めたいと考えている。

一方、アメリカのプログラムは、オーストラリアへの学生派遣と交互に行われている。本学の協定校であるアイオワ大学のインターナショナル・オフィスの協力で地域の学校での授業実践が実施され、ここ数年で現地受け入れ体制も整い、アイオワの地元の新聞にも本学の学生達の活躍が掲載されるほど参加型プログラムを充実させている。協定大学の協力を得て、現地学校受け入れ体制を整備するまでには時間と忍耐の必要な事業であったが、引率にかかわった教員の熱意と努力のおかげで、ようやく我々の欲するプログラムに対する現地の理解が得られたといっても過言ではない。

上越教育大学では、平成一八年度文部科学省の「大学教育の「国際化推進プログラム」として海外教育現場の視察訪問調査が行われ、その調査に基づき、平成一九年度大学院新科目「海外フィールド・スタディ」が立ち上がった。カリキュラム化された科目の実施先は、オーストラリア、ニュー・サウス・ウェールズ州ウーロンゴン地域にある学校である。

「海外フィールド・スタディ」の開講は、語学力強化のための研修、海外学校現場における長期的実習、ホームステイによる滞在という本学学生からの要望が出ており、その要望を満たすプログラムの実現が検討された結果である。オーストラリアでの実施は、それまでに学生の自主参加の形でインターンシップを実施していること、また、本学大学院生約四〇名への調査を行った結果、オーストラリア

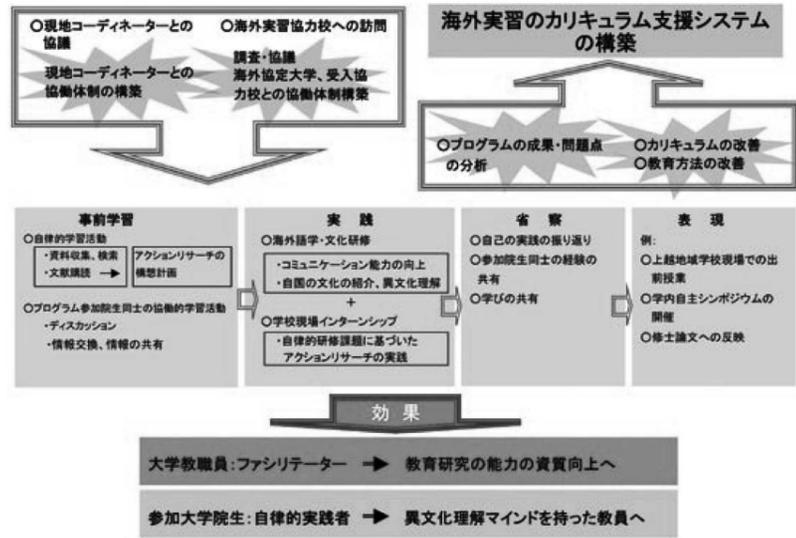


図1: プログラムの基本概念

への海外研修希望が、六四%とものも多く、研修の内容として学校での授業参観や異文化体験、教育事情研修などを希望する学生が七〇%、八〇%と、関心の高さを示したことに基づくものである。

# 特集

## 日本人の海外留学の促進に向けて

### 海外学生派遣の推進を目指して

「海外教育（特別）研究」、「海外フィールド・スタディ」の展開において、今後このプログラムを持続し、発展させるための共通点は、現地と本学との連携体制の強化であると考えられる。現地ネットワークの存在は、海外派遣プログラムを成功させる上で、最大の強味だが、連携体制を充実させるためには、双方の努力と理解が必要である。韓国やオースト

体験だけではなく、日本語や日本文化についての紹介など、日本を外から見る視点を養うことにもつながる。オーストラリアの教育現場に触れることが、日本の教育現場に対する新たな視点につながり、問題意識を深めることに成りうる。

- ・参加者同士の協働体制、受け入れ校・現地コーディネーターとの連携体制を構築することが基本であり、参加者の自律的活動と、協働体制の構築がプログラムの原点となる。
- ・参加学生が主体であり、授業担当教員、及び現地コーディネーターは、ファシリテーターとしてサポートをする役割を担う。

### 「海外フィールド・スタディ」の特徴

「海外フィールド・スタディ」は、数ヶ月の事前準備期間、現地実習一ヶ月、事後の報告会、ポート・フォリオのまとめ、報告書作

上越教育大学では、教職キャリア教育として、入学早期から体験的な学習や教育実習を通して主体的な学びの機会、総合インターンシップによる教育現場体験を系統的に導入している。また、教師教育においては、学校現場における長期的なアクション・リサーチによる課題解決にあたる学校教育プログラムと、その成果を省察し、学部学生、大学院生、現職教員大学院生間の協働、協力教員、専門の異なる大学院生間の協働から、学校現場の実践に基づいた教師教育プログラムへの還元というマルチコラボレーション方式によるプロジェクトを実践している。「海外フィールド・スタディ」は、地域の学校における本学の研究・実践を、海外の学校現場に適応したプログラムである。この科目のカリキュラムは、「事前学習―実践―省察―表現」に分けられ、一年間を通してリフレクションを継続していきながら、参加学生が自律的にかつ協働的に活動し実践していく。

成という一年間の設定である。事前準備として、個々の学生が自分の目的を明確にし、現地での授業準備や、アクション・リサーチの計画に時間を費やす。また、オーストラリアの教育事情等、必要な情報を収集し、参加者同士の情報交換を行う。参加者の目的に応じて、現地コーディネーターが受け入れ学校と担当教員を設定する。「海外フィールド・スタディ」の特徴は、以下のようにまとめられる―

- ・計画されたプログラムではなく、参加者自身が主体的に活動していくチャレンジ精神が求められる。
- ・参加者が自分の置かれた状況の中で、どう対応すべきかを柔軟に考え、行動することが求められる。この柔軟性は、学校現場の教師には、日々、必要な教師力である。
- ・参加者個々の目的に応じた研修である。
- ・滞在期間中、英語の実際の使用を、求められる環境の中で生活する。
- ・現職教員を含む大学院生を対象としたプログラムであり、海外研修の前の事前準備期

リアの場合、本学の学生派遣と、相手校の受け入れについて、常に相互交流の在り方を検討し、組織的な体制と、学生同士・教員同士の人的な心のつながりとの両面を構築していかなければならない。一方、アメリカでの「海外教育（特別）研究」や、オーストラリアでの「海外フィールド・スタディ」のように、こちらからの海外派遣のみであり、しかも、本学学部生・大学院生の受け入れ先が複数の現地小学校・高校である場合、なによりも大切なのは本学と受け入れ学校との間に入り、調整役を努めてくれる現地コーディネーターの存在である。本学のプログラムの趣旨を理解し、学生達の研修目的を達成するための受け入れ学校への働きかけは、本学と現地コーディネーター、そして、現地コーディネーターと受け入れ学校との信頼関係が築かれなければならない。さらに、参加学生自身の研修のみにとどまらず、学生の授業実践が、受け入れ学校にとって歓迎される要素を含まなければプログラムは継続しない。受け入れ学校の児童・生徒の異文化理解に貢献する

間における資料収集や、教材収集、授業案作成、自分の目的についての再検討が重視される。また、実践後、修士論文への反映、報告書作成、報告会実施、所属学校等での発信、実践とリフレクションをまとめたポート・フォリオの作成など、体験を体験のみで終わらせず、様々な形で継続的につなげた学習とする。

・自己研修の目的と、国際貢献の目的の両面がある。

・自分の専門分野におけるアクション・リサーチ、授業実践、海外インターンシップ



写真：小学校での授業実践の様子

という本学参加学生側の意識も必要である。いずれにせよ、海外派遣プログラムを一回、一回こなしていく中で、検討し改善を重ねながら、よりよいプログラムとして充実し、海外との連携を強固にしていく過程が重要である。この過程の中で試行錯誤が真の協働体制をつなげるのであると考える。そして、そうした過程において、参加学生の経験が生かされ、さらに次の参加を生み出し、長い時間をかけてではあるかもしれないが、異文化理解マインドを持った教員の育成が現実のものとなっていくのである。さらには、現地の学校教育にも、少なからず影響を与えるものとして位置づけられ、逆に現地の学校から求められるプログラムとして発展していくことを願いたい。



図2：本の表紙  
『オーストラリアの学校現場実践  
— 現職教員大学院生からのレポート —』  
発行所：株式会社 三恵社  
(http://www.sankeisha.com)